# ４［随筆］『春を呼ぶ』

　誰でも子どもの頃は、例えば咲きほこる桜を見て「きれいだなあ」と思うことはあっても、「春だなあ」などと心の中でつぶやく、なんてことはなかったのではないだろうか。だからといって子どもが季節の変化にうといのかというと、それも少し違う気がする。春とか季節とかにとらわれることなく、①変わりゆく世界を受け入れていたように思う。

　ペンネームにもそのままａハイシャクさせてもらっているが、僕たちは小学生の頃、東京の大森という町に住んでいた。春休みや夏休み、冬休みになると、愛知県に住む祖父母の家で過ごすことが多かったのだが、虫や魚をとってはしゃぎまわる僕たちを見て、祖父はつくづくかわいそうだと嘆いていた。

　だけど僕たちは東京でも、虫をとって遊んでいた。アスファルトで舗装された町にもモンシロチョウが飛んでいたし、線路沿いにあるような、たいして広くない公園でもてんとう虫やカナブンならｂカンタンに捕まえることができた。東京湾のまで行けば、広大な未整備の空き地がいくつもあって、そこで捕まえたイナゴは、恐ろしくなってすぐに逃がしたほど、巨大だった。

　通学路でモンシロチョウを見かける頃になると、僕たちは校庭のわきにある池を点検しに行った。昨日まで木切れやが浮かんでいるばかりだった小さな池に、毎年唐突に現れるの卵を待っていたのだ。まだ冷たい水の中に、ゼラチン質のチューブがｃユれて、なんだか未来都市のミニチュアみたいだった。

　その蛙の卵を家に持ち帰ったことがある。チューブに包まれた黒い粒々はおとなし過ぎて、まるで生き物という感じがしなかった。ところが、一週間もしないうちに、ト音記号みたいなおたまじゃくしが、水槽にみっちりとあふれかえっていた。

　おたまじゃくしはに困らなかった。パンくずを浮かべると勢いよくつついたし、ご飯粒もよく食べた。ところが手足が生え、がなくなって蛙になると、何も食べなくなってしまった。心配してｄズカンで調べると「生きている虫しか食べない」と書いてあり、チューインガムのような舌で、蛙が小さな羽虫を捕食する瞬間の連続写真がのっていた。

　それから毎朝五時に起きだして、まだ暗い公園で白いビニール袋を二人で振り回すのが日課になった。虫取り網では網の目が大きすぎて羽虫が逃げてしまうし、なぜか明るい時間では羽虫が眠っていると思い込んでいたのだ。羽虫の群れを見つけるとビニール袋を広げて突進して行く。すぐビニール袋の口をｅシバる。すかさずポケットから新しいビニール袋を出して、繰り返し群れに突っ込んでいく。

　何日そんなことを続けただろう。②羽虫の捕獲なら、蛙本人に任せた方が効率的だとふと気づき、蛙を公園に連れて行ったのだ。人工池のそばの茂みで水槽のふたを開けて最初の一匹を手の平にのせると、蛙は勢いよく跳ねて軽い音を立てて茂みに落ちた。

　今では蛙に触れるのさえ気おくれする。虫も苦手だ。そのかわり桜を眺めて、「［　　Ａ　　］」と思うようにもなった。うまく言えないけれど、やみくもにビニール袋を振り回していた頃に比べて、今までの時間と、自分に残された未来の比率が大きく変わったという実感が、僕たちに季節の名を呼ばせるのかもしれない。③心のどこかで時を呼び止めようとしているのだろう。

●語注

ゼラチン＝淡色・透明でゼリー状のもの。

問１　二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　本文中にある表現を一つ抜き出して答えよ。6点

〔　　　　　　　　　　〕

問３　次の一文が入る直前の六字を本文中から抜き出せ。6点

　どうも東京を自然のまったくない、コンクリートと鉄でできている街だと思い込んでいたようなのだ。

〔　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部①の具体例を本文中の言葉を用いて、次の文に続くように二五字以内でまとめよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕に行ったこと。

問５　傍線部②とあるが、「僕たち」が気づいたのはどうすることか。一〇字以内で説明せよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　空欄Ａに入る最も適当な語句を本文中から抜き出せ。6点

〔　　　　　　　　　　　　〕

問７　傍線部③はどのような気持ちか。最も適当なものを次から選べ。8点

ア　長く人生を生きてきたことで、過ぎていった時間がなつかしく感じられる気持ち。

イ　死を意識するがゆえに、目の前を時が過ぎてゆくのがたまらなくなる気持ち。

ウ　人生に残された時間の少なさを意識するがゆえに、時間の経過を惜しむ気持ち。

エ　時がゆっくり流れてくれたら、人生を楽しむ時間が長くなるのにという気持ち。

オ　無理とは分かっていても、時間が流れてゆくのを何とか止めたいという気持ち。

〔　　　〕

【解答】

問１　ａ拝借　ｂ簡単　ｃ揺（れて）　ｄ図鑑　ｅ縛（る）

問２　ト音記号みたいな

　　　チューインガムのような

　　　未来都市のミニチュアみたい

問３　嘆いていた。

問４　モンシロチョウを見かける頃になると池に蛙の卵を探し（に行ったこと。）（25字）

　　（傍線部の内容がなければ、それぞれ４点減点）

問５　蛙を逃がしてやること（10字）

　　　蛙を放してやること（９字）

問６　春だなあ

問７　ウ

■覚えておきたい語句

□5　拝借……………………借りること。（謙譲語）

□13　唐突……………………前後のつながりや前触れもなく、突然。

□29　気おくれ………………自信を失ってひるむこと。

〔要　約〕

「変わりゆく世界の受け止め方の違い」というテーマが、1段落と9段落できちんと照応していることをおさえる。

　　　　↓

子どもの頃と大人になった今では、変わりゆく世界の受け止め方が違う。それは、今までの時間と、自分に残された未来の比率が大きく変わり、残された時間が少なくなったことに原因があるのかもしれない。（94字）

〈筆者＆出典〉大森兄弟（おおもり・きょうだい）兄弟ユニットの作家。兄は一九七五年（昭和50）生まれ。看護師。弟は一九七六年（昭和51）生まれ。会社員。ともに愛知県生まれ。『犬はいつも足元にいて』で文藝賞を受賞し、デビュー。同作は芥川賞の候補作ともなった。ほかに、『まことの人々』などがある。本文は、「春を呼ぶ頃」『朝日新聞』（二〇一〇年二月二〇日朝刊）より。

【読みのセオリー】

★比喩を読み解く

　比喩は、「たとえるもの」と「たとえられるもの」の二つの間にある、類似性を示す技法である。次のように考える。

①両者の間にどのような類似があるかを読み解くことが、第一のポイントになる。

②「たとえているもの」の特徴を、「たとえられているもの」に当てはめて考える。

　比喩では、両者の類似点にまず着目する。

■読みのセオリー［実践］比喩を読み解く

　『羅生門』に、「猿のような老婆」という直喩がある。

ここでは、

［１　　　］を

［２　　　］にたとえている。

・猿の身体は小柄

　　　↓

　［３　　　］の身体が小柄

・猿は背中を［４　　　］

　　　↓

　老婆は背中を丸めている

・猿の顔はしわくちゃ

　　　↓

　老婆の顔もしわくちゃ

・猿はずる賢そう

　　　↓

　老婆も［５　　　］

〔解答〕　１老婆　２猿　３老婆　４丸めている　５ずる賢そう

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問５　本文中に擬人的な表現を用いた箇所がある。一箇所抜き出して答えよ。

　［答］　羽虫の捕獲なら、蛙本人に任せた方が効率的だ（咲きほこる桜）

＊新問

問６　30行目「やみくもにビニール袋を振り回していた頃」とあるが、それは何のためか、簡潔に答えよ。

　［答］　蛙の餌の羽虫をとるため